

武蔵野英文学会 講演会記録その他

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学英文学会 公開日: 2019-11-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 晴雄 (編著) メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1102

武蔵野英文学会 講演会記録その他

佐藤 晴雄 (編著)

そういうものがあるとは思っていたが、かつての助手さん方による武蔵野女子大学英文学会の克明な事務記録がある。助手(の制度)は攪拌されてやがて一人態勢の学科事務となり、「最後の学科事務」深谷礼子さんが学部学科事務室を閉めるさいごに整理して残した下さった、英米文学科・短大英文専攻の記録が、2号館地下の学事課倉庫におかれていた。歴代の助手さん方の手で整理保存されたものと思われる。これらのうち武蔵野英文学会関連のものを学事課若手職員らに7号館4階北奥の英米応接室に運んでいただいた。6、7個のダンボール箱の一つに収納されていた、「英文学会：メモ」と「英文学会1」の2冊がそれである。前者は背に「英文学会：メモ」としてされたコクヨ製B5サイズ灰色の、出納帳のような頑丈なつくりのノートだ。後者「英文学会1」は、マルマン製The Standard Type Filenoteなる、透明ポケットが脱着できる黒いルーズリーフ式のファイルである。「出土」した品々は、以下のとおり。

- ・講演会の録音テープ オープンリール=13本、カセットテープ=44本。
- ・COLOR PRINT SEIYU の袋 袋うらには、「田無店6月20日・お客様名=野崎様・フィルム=S・フィルムサイズ=ライカ12EX・金額合計=724」の記載。中身はネガと変色しかけた11枚のカラー写真で、昭和51年の浜本武雄教授の講演会の写真。
- ・『武蔵野英米文学』バックナンバー(助手さんらがいたころは、諸方の大学図書館・英文研究室に送付していたが、近年の一人態勢そして現在の0人態勢ではそれも途絶えたため近年在庫過剰。)
- ・最終講義のプリントほか 茶封筒に鈴木五十鈴、井上寿子、山本幸男の各

先生の最終講義で配布したプリントなど。「斎藤和一教授最終講義」カセットテープも。(ただしテープ・リーダー部分が切れて、現在聞くことができない。)

- ・ ベージュの書類とじ 数年の英文学会会費納入書類。在籍4年間(2千円)または2年間(1千円)の会費の記録。雑誌出版経費の4割は会費により、残りが大学からの補助。会計検査にそなえて保管したものであろうが、今となっては英米・英文学生の貢献の記録である。
- ・ 出金伝票
- ・ 「英文学会：メモ」 英文学会の記録は昭和48年度からはじまる。主として毎年2回(後年は1回)開催の講演会と雑誌出版の記録である。1回の講演会に講師2人のこともある。会則6条3項に、「委員は専任教職員及び学生若干名」とあり、ほぼ順番に3人の教員が編集委員を担当。英米・英文とも各学年からだす4人の学生委員の氏名の記録が昭和60年度まである。印刷製本は、1～13号桐原書店、14～22号(株)サンエンタープライズ、23号(有)共信社印刷、24～44号(株)多摩ディグである。発行部数は最多時1,650部(27号)。「英文学会：メモ」の記録は、平成9年度(1997)と翌平成10年度(1998)の30号記念・退官記念の論文集『英米の文学と文化』出版でおわる。
- ・ 「英文学会 1」 平成10年度(1998)～15年度(2003)の記録。国会図書館逐次刊行物部から武蔵野女子大学英文学会あての「ISSN(国際標準逐次刊行物番号)の割り当てについて」の通知。武蔵野女子大学英文学会之印の「公印登録票」(つげの公印2種類)。(ほかのノートから切り取った)平成10年より以前からのものと思われる「大学住所録」(私立・国立・公立の大学住所、その他)は、学会誌送付の送り先。その中には「斎藤和一・大和資雄・吉武好孝」の住所が一重線で消されており、残念なことである。残念なのは、他界されたことではなく、ご退職なさった先生方に会誌をながらくお送りしていないのである。気づいたら最終号のていたらく。「英文学会 2」は、ない。

以下この項目は、「英文学会：メモ」「英文学会 1」の記録を骨組みに講演会記録を中心に置いて、そこから見る〈武蔵野女子大学 英米文学科小史〉のころみである。助手さんらが遺してくれた骨組みに、主として〈*〉をもちいた註を加えることにした。忙しい最近の方々には縁遠いとおもわれる、昔年の主だった外部・内部の講演者の素描を、蕪雑な筆ながらお見せ致したくおもう。(私などが、最近の方々は、などと書くと長老の先生方から、じゃあわたしたちは過去完了なのかとか、臍が茶を沸かすよとか言われそうだ。)また、わたしの知識・能力の限界から、公平には出来なかったことをお断りする。もう一つ言い訳をすると、昭和 50 年までの講演はオープンリールのテープに録音されており、現在容易に聞けないために、文字記録もないことから演題が不明のままの講演もある。その筋の業者にだして CD 等に焼き直す予定だが、おなじ聞くなら本来の(旧式の)録音機で聞きたいとおもいから、ぐずぐずと日を重ねている。手元にある録音機は、昭和 30 年代製の SONY TC-102 でちゃんと動くが、テープスピードは、世の中に 5 速あるというスピードのうちの 2 速 [9.5 cm/s(3.75 インチ/s)] と 3 速 [19 cm/s(7.5 インチ/s)] の 2 種類で、講演会のを再生すると早口でほとんど聞き取れない。1 速 [4.75 cm/s (1.875 インチ/s)] で録音されているようで、つまり講演会というものは長いから最高におそい速度がいいという録音時の配慮であろうか。諸姉諸兄のお知恵を乞うしだいである、この録音機で聞けないものか…。

余談ながら第 3 回以降はほぼ録音テープがあるが、昭和 41 年の第 1 回～第 3 回のはない。ないのか録音しなかったのか…。第 1 回講演者は日本の英文学界の頂点とも言うべき齋藤勇博士で、これを録音しないのは変だなど思っていた。博士には本多顯彰主任教授がお願いされたのであろうか。千輪絹子先生が齋藤博士のお宅にお願いに上がったそうである。その点を先日長老に問うてみたところ、やや間をおいて言われた。録音テープはあったのだが消えてしまった、講演後テープの箱に「第 1 回講演会 講師…」とか書かないでちょっと置いておいたら誰かがその上から使って消えてしまい大騒動になった、と。なるほどオープンリール・テープにはそういうことがあった。

カセットテープならツメを折ればいいが、むき出しのテープにはツメもなく物理的にふせぎようがない。史実として記しておく。

昭和 25 年 (1950 年)

武蔵野女子短期大学設立、文科国文専攻、文科英文専攻、家政科

昭和 40 年 (1965 年)

4 月：武蔵野女子大学設立、文学部 日本文学科、英米文学科開設 *

日本文学科主任教授＝土岐善麿^{と きぜんまろ}、英米文学科主任教授＝本多顯彰^{あきら} **

* この年、他に英文科が新設されたのは、白百合女子大学、フェリス女学院大学、神戸海星女子大学。〔『英語青年』1965 年 5 月号「片々録」〕

** 本多顯彰〔明治 31 年(1898)～昭和 53 年(1978)〕1970 年に歿した市河三喜追悼を、「最高速度をもって英学界に君臨する幸福をかり得た」と結ぶのは齋藤勇(後出)。本多顯彰は亡師に対しておぼえた恐怖を——、「足音もたてないでうしろから近づき、私の肩越しに私が読んでいた本をひっくりかえし、表紙の題字を読むと、黙って本を元のままにして入口から出て行った、その時には恐怖でふるえた」と語る。イエスベルセンの『グラマ』が教科書の英文法は、「300 語以上字引を引いた上でないと出席できなかった。(中略) 毎時間指されてくたくた (中略) blue boys(巡査)の -s がとれるとヨコネ〔横根：^{そけいりんば}鼠蹊淋巴腺腫の俗称。性病の感染による。〕になるというたぐいの例がざらなので、少しも油断ができなかった。(中略) ある日先生は疲れはてた私に容赦もなく先へ先へと読ませて、ついに 1 時間半に及んだ。(中略) 学生には、学問をする機械のように見えていた」〔『英語青年』1970 年 7 月号〕。その先生が、ある時あることで人間であることを露呈したという。その時をさかいに怖くなくなったのか、どうなのだろう。「こわくなくなった市河先生」という題の追悼文は、いまだにコワイ先生との距離を測りかねている元小学生、のかんじがしなくもない。東大英文科在学中、「半分は病気でねていた」が、その間隙に出席したらかような授業風景となった。講義にあまり出てこない作家志望の学友が、「下読み」をしないので来たら指され、やがて訳しはじめた名調子には一同驚いた。それは古文調、というより坪内調、というより坪内逍遥訳そのものを読みあげている。訳はあれよあれよと思ううちに進んで、だれかがクスクス笑うのが聞こえる。「美川米喜^{よしかわべい}」先生は顔を赤くして、狼狽している。このように、「酒田君は、こ

のたくまざる純真さによって、美川先生の堅さを快くもみほぐしたようなもの」などと KAPPA BOOKS の『大学教授』(昭和 31 年) にでてくるのは、むろん市河三喜だ。「御迷惑をおよぼすことを恐れ」たそうで、「欧州社社長青尾氏」などと、半世紀後の我われにもよく透けて見える仮名が全編にある。王政大学つまり王がつかさどったのだろう法政大学に、かつて法政騒動があった。これをかたる「恩人の逸話」には、「斗酒なお辞せず…酒の飲めない山本五十六元帥の膝に這いあがって、そのハゲ頭をなめるかと思えば…(後略)」という破天荒な「恩人」は中村乱酒等々、捧腹の仮名がつぎつぎに登場する。

さて、シェイクスピアについての「私の思い出」(『英語青年』1964 年 5 月号) および『遠い潮騒』(1965 年) によると、卒業後は新設の九州大学法文学部で、「豊田実先生の下でシェイクスピアの講読をすることになり」、関連の古代ローマ演劇を原典でよまねばと、「学内のギリシア語初級を聴講」までしたのは見事に破綻した。それでも熱中して九大での講義のためにひたすら勉強した。だがある日、東京帝大出の少壮講師のミススペルをあざとく発見した聴講の女子学生がふれ回り、さらに介在する悪意がこれを増幅する。告知をうけた法文学部の宗教学教授が、「マタイの綴りさえ間違えるようなものに、講義を担当させるわけにはいかぬ」といきりたち進退谷まっただかに見える。じつはこの話しを本人が聞かされるのは十年後で、万年講師の境遇にいら立つ本多は、4 年半後女高師=東京女子高等師範に転任、それも、「美川先生」にお願いしてだったという。「大学出たての青二才」に九大での講義はそもそも無理だった、でもあの頃ひたすら勉強して、「病気がちだったが、ひとたび教壇に立つと、頭痛も腹痛も去るのだった。」それでも、Matthew(マタイ)のうしろの余計な s でつまずいたことにかわりはない、と本多はおもった。さらにはシェイクスピアといえば坪内逍遙独占の時代に、現代語訳に悲壮なおもいで打ち込むが、古典への批判、神聖冒瀆で英文学会を追われることになる。「美川先生」にまで、「エノケンがハムレットをやるかと思うと、本多君がハムレットを訳し」とひやかされくさされ、「先生の弟子たちも先生の尻馬にのった。」さまさま胸がおさまらない。そこで新聞に連載中の「翻訳文学の現状」に、「上田敏、夏目漱石、厨川白村、既に亡く、芥川龍之介逝き、去年はまた逍遙逝いた。今や英文学は冥土において全盛である」と書いたものだから、英文学会もシェイクスピア協会も脱退を余儀なくされた(『翻譯文學の現状(二) — 佛文學者跳梁の因』『東京朝日新聞』昭和 11 年 2 月 8 日)。本多の現代語訳を支持したのは、三木清、日高只一、坂崎担、それに、「大田泰雄氏」ぐらい。「大田

氏」とは、後年武蔵野女子大で再会することになる。

前後するが、九州から帰京した本多が、目録でみつけたハズリットの『シェイクスピア・ライブラリー』を取り寄せたが、「お金は市河先生に払っていただいた」[William Carew Hazlitt 編: *Shakespeare's Library* (1875)であろう。Hazlitt は批評家 William Hazlitt の孫の書誌学者] そうである。せっかくの女高師も「そそっかしさから…ふかくも考えないで」やめてしまう本多は、じぶんの才能に甘えていたかも知れない。そのような気まぐれな本多であるのに、本多が本をひっくりかえされたあのとき怖がっていたのは、なにかを危惧する「美川先生」の方だったかも知れない。

法政時代の弟子・同僚のかたる本多像は——、「髪はぼさぼさ…何か頼りない人物という感じ (中略) 無愛想で笑顔を見せるということはあまりなかった。しかし目には特徴が (中略) …異様に鋭く、じっと相手を見つめる視線 (中略) は恐ろしい」(大島芳材)、「感情の起伏の激しい人」「アルコール類は一切受け付けない」(岡本成蹊)、「お見かけするよりずっと足腰が丈夫」(岡本誠)、『法政大学英文学会会報』13号(1979)。散歩に学生のみならず同僚も、三浦三崎までさそい出す健脚ぶりであった。本多から電話で散歩のさそいをうけて、「近郊の散歩ぐらいに(おもって)…賛成した」のは岡本成蹊だ(のち武蔵野女子大でながく非常勤講師をされた)。本多には三崎ぐらいはへっちゃらだったのである。哲学の黎明期、東洋大学の前身哲学館を興した井上円了とともに、哲学という新分野を意気込みをもって開拓した井上哲次郎が東大にいた。聴講して、哲次郎博士の奇妙な英語の発音になやむと同時に退屈にかんじた本多は、隣席の学友にささやいた——、「仕方がない、国府津で汽車に乗ったと思うんだね、二時間たたなきゃ、降りられないんだから。」なぜ国府津がでてくるかという、「私たちは、ときどき、きれいな海が見たくなると国府津まで出かけて行った」(『大学教授』)。

ふわふわと国府津へと逍遙したのは学生時代のこと。のちの太平洋戦争中、国府津は因縁の地となる。

ふたたび前後するが、蒲柳の質だった虚弱児だったとあちこち書いているが、じつはそうでもなかった。生れたとき、「手足の細い、頭ばかり大きい、奇型児のような」こどもで、9歳のときにはルイレキ[瘰癧=慢性結核性リンパ腺炎の俗称。小児の頸部に現れ、結核菌のためにリンパ腺がはれる]を診断される(『遠い潮騒』)。そのおなじ顯彰少年が、幼少時の喧嘩はいつも年上のこども相手に、泣かされたことは一度もなかったし、高校時代は短距離の選手で水泳は5里(20キロ)の遠泳の試験に合格して

いる。大学卒業後の福岡高校時代には、水泳友だちが朝鮮海峡横断をするという地元紙の予告記事をよみ、本多も参加したくてたまらなくなる——「九州の人たち、とくに、教えていた学生たちをあっと言わせたかった。英文学しか知らない文弱な人間とのみ見られたくなかった。朝鮮海峡を横断したら、英雄になれる」(『旅路の果てに』)。海峡横断をあきらめたのは熱を出したからで、熱が出たのは博多湾で予行演習をしたからだった。

昭和7年、東京女子高等師範を辞して、つまり官学=公務員をやめ33歳で文筆稼業に転じる本多だが、一方では法政大学で時間講師を始める(のちに文学部教授)。どちらも頼りない二足のわらじに見える。戦雲がたちこめると、教室の学生はへりつづけ、やがて軍は学生らを、「投網にかけたように、総ざらえに持ってゆくときがきた」(『指導者』)。学生の消えた教室に止まる理由もなく、学校を去る決意をする。大政翼賛会は、軍国政府の手前味噌的サポーター集団であるが、大部分の大学教授もそこにからめとられる。大政翼賛会文化部のお声がかかりでまずできたのが外国文学部会で、つぎにできた言論報告会の幹事長は中野好夫だった。外国文学部会は国文学部会とともに愛国百人一首を選定、朝日新聞その他に中野好夫・西村孝次らが選者として解説を書く。そのような時代潮流の中、「運動」(左翼)とは道を異にしつつも反軍的言辞を弄する「危険な」本多は、「ジャーナリズムでは、私はまったく不用な人間になってしまっていた」(『指導者』)。田舎で百姓をすることにきめ、湘南をうろつき鶺鴒沼をあさった。辻堂・茅ヶ崎・平塚・大磯・二宮…、さいごに国府津でやっと見つけたのが、町はずれの「くずれる一步まえの…見るからに不健康そうな家。」新聞に「帝都を死守せよ」とか「帝都を見ずる非国民」の見出しがおどる中、うしろめたさを感じながら、昭和18年6月に一家は国府津に移転する。

耕作地がとぼしい土地でやっと一畝〔1畝は1反の10分の1〕借りることができたのは、絶壁をよじ登った先の山道を20分登ったそのまた先にある、山の急斜面に作った段々畑だった。農具をかついで登ると緊張と疲労でしゃがみこむ。じきに本土の空襲が激化、「国府津でもサイレンが毎日鳴った。」浜松はすでに艦砲射撃を受け、国府津もいつ受けるか知れないので、山中湖畔の山小屋に再移転をきめる。東京の家を売った金は、畑にする山林千坪を買うのにぜんぶあてた。食糧は、金をもって物乞いのように農家の軒下で頭をさげても、ろくに手に入らない。幸運にも裾野で1千本のイモ苗を入手、リュックにも収まりきらない苗をかかえて朝の4時に国府津を出ると5時間バスを待ち、たぶん山中湖ま

でまる一日かかったとおもう。「たがやししながら私は、なんどももうおしまいだと思った。心臓が喉のところで鼓動し、息がつまりそうだった。」肥桶を天秤棒でかついだら、「肩にくいこみ骨が折れそうだった。」国府津も山中湖も米がとれない土地で、配給はトウモロコシの粒である。臼で挽いた粉は団子にして、イロリの灰の中で焼く。米国の植民地時代から奴隷制時代にかけて、ash cake というものが奴隷の主食だった。本多一家の主食と調理法はほとんどこれとおなじで、奴隷はこねたトウモロコシ粉をおおきなオークの葉にくるみ熾き火の灰に入れたから、米国の方が上等であったかも知れない。

(息が)もうおしまいだ、というところまでやるのが本多の真骨頂で、そのいきおいに致命的なルイレキも影を潜めたのだろうか。写真を見るとやせ型だが、そのわりに手ゆびがおおきくて骨格は骨太のかんじである。本多教授の健脚におどろくのちの同僚の方々も教え子の方々も、ぎらぎらした眼ばかりに注意をうばわれたのか、三崎までの散歩など朝めし前の気晴らしであったろう。

以下略歴。愛知県愛知郡八幡村(現在の名古屋市南区)生れ、文芸評論家。旧制八高(第八高等学校の後身は現在の名古屋大学教養部)から東京帝大英文科へ。旧制福岡高等学校、東京女子高等師範学校(後身はお茶の水女子大学)教授をへて法政大学、武蔵野女子大学へ。その批評活動は、「講壇的ともいわれたが、一貫して内省的ヒューマニズムと社会批評的傾向を維持した」(『新潮日本文学辞典』)。(著書)『感動と批評』(1936)、『大学教授』(1956)、『遠い潮騒』(1965)。(翻訳)シェイクスピア『ハムレット』『ロミオとジュリエット』(ともに1933)、D. H. ロレンス『息子たちと恋人たち』(1939-54)、A. ハックスレー『ガザに盲いて』(1955)ほか。昭和53年6月30日歿(79歳)。「英米フォトギャラリー」1頁。

昭和41年(1966年)

千葉大定年退職後、吉武好孝着任

5月:武蔵野女子大学英文学会創立(『武蔵野女子学院五十年史』巻末年表では4月創立)

(第1回 講演会 5月)

講師=齋藤勇* (演題不明) (録音テープなし)

(第2回 講演会 11月)

講師=斎藤絹子(助教授)** 『『ハムレット』復讐劇からの解放』

(録音テープなし)

講師＝吉武好孝（教授）*** 「現代英米文学の思想的背景」

(録音テープなし)

* 齋藤勇 [明治 20 年(1887)～昭和 57 年(1982)] 福島県の農家の長男に生まれる。県立福島中学校（後身は現在の福島県立福島高等学校=福島市）在学中、「二人のすぐれた英語の教師にめぐりあい、その感化が齋藤少年の将来を決定。一人の教師からはロングフェローを教わり全集を読破、在学中に『ロングフェローの人生観』という原稿用紙 30 枚の論文を書く。他の一人からはパスカルの英訳本や弘法大師全集を勧められた。博士の求道的な姿勢や文学に潜む衝動力への関心の根をうかがうに足る。また高山樗牛^{ちよぎのう}の天才礼賛の主張に反撥、綱島^{りょうせん}梁川の凡人肯定論に共感、凡人たる自覚のもと…たゆまず生きる行き方を選びとった」(『英語青年』1975 年 9 月号「片々録」中の<齋藤勇著作集>の記事を圧縮)。福島中学から二高(後身は東北大学)をへて、明治 44 年東京帝大英文科を首席で卒業後ただちに講師に。以後、大正 12～14 年欧米留学、昭和 2 年キーツの論文(*Keats' View of Poetry*)で文学博士号、昭和 6 年教授就任。その 5 年後の昭和 11 年(1936)、東京帝大英文科に入学した、のちの『夕鶴』の劇作家木下順二は、「四月十三日月曜日に齋藤勇先生による、今日の用語でいえばオリエンテーション。[県立熊本] 中学五年のとき先生の英文学史 [『思潮中心の英文学史』] を読んで英文学志望をきめた。その先生の訶咳に初めて接した感激は非常なものであった」と述懐する[『本郷』(1983)]。昭和 22 年東大定年退官、昭和 22～28 年東京女子大学長、昭和 36 年学士院会員。昭和 48 年国際基督教大学客員教授を辞して以来一切の公務から離れた。昭和 50 年(1970)には『齋藤勇著作集』(全 7 巻 編集委員 中野好夫・朱牟田夏雄・平井正穂)の刊行開始、翌昭和 51 年には、昭和 50 年度の文化功労者に選ばれる。90 歳もおおくないその頃、「いまでも毎日 6 時間、旧著の補筆・訂正を行なっている」(『英語青年』1975 年 9 月号「片々録」)。狂気の孫の手で最晩年はとじられた。昭和 57 年 7 月 4 日歿(95 歳)。

** 齋藤絹子(現姓=千輪) [昭和 4 年(1929)～] 「齋藤絹子は私です。たしか英文科創設 2 年目(?)頃に専任教員として寄せて頂きました。英米文学会を発足させようというので、その第 2 回目の講演をやらされた次第です」は、「終刊記念号寄稿問合せ」に答えて下さった千輪絹子先生からの回答のハガキ。『英語青年』「英学消息」は、「12 月 12 日に講

演会を開き、斎藤絹子氏の『ハムレット』について(ママ)、吉武好孝氏の『現代英米文学の思想的背景』を聞いた」と報じている(1967年4月号)。富山県生れ。東京女子大学英米文学科卒、米国ミルズ・カレッジ留学、東京都立大学大学院修了(MA)。(専門分野) エリザベス朝演劇、近現代劇文学、17世紀詩人など。(論文)「エドワード三世」(『英語青年』1964年5月号<シェイクスピア生誕400年記念特集>のシェイクスピア全作品論で『エドワード三世』論担当)、(共著)『イギリス名詩選』(初版1966、改訂版1982、1990)、『シェイクスピア・ハンドブック』(初版1969)。尚、上記ミルズ・カレッジは後年、武蔵野女子大学時代の協定留学提携校であった。「英米フォトギャラリー」6頁。

*** 吉武好孝 [明治33年(1900)~昭和57年(1982)] 大分県東国東郡国見町に生れる。本多顯彰が駒澤大学に転じて以降の武蔵野女子大学英米文学科主任教授。「追悼 吉武好孝」(『英語青年』1982年7月号)によるとそのお人柄は、「慈愛に満ちた温顔」(鈴木保昭)、「よく若い人たちの、学問上の指導もなさったが、生活万般の面倒もよく見られた」(池田哲郎)、「親分肌のところが」(村岡勇)、「就職、はては結婚の世話にいたるまで(中略)…すべて一手引受けという有様(中略)…明るい、おだやかなお人柄と、それでいてイザというときに示される意外なシンの強さ」(木内信敬)、「天衣無縫ともいふべき人柄の良さが…。あの闊達で健全な向日性」(鈴木五十鈴)。

また吉武好孝は、雑誌『シルヴァン』(昭和30年(1955)1号発刊)のシルヴァン同人会の中軸であった。創刊号発刊の辞「シルヴァンを発刊する」は謳う——、「ひとしく東北大学の英文学科を出て東京及びその近在に住む同人の(後略)…差しさわりなく日和を見て、『まるで英文学者のように』なることは、…活撥快活に『文学の共和国』に入る道でない、と考えているだけである。(中略)…《シルヴァン》は<森に住む人>である。われわれはかつて杜の都にいた。(中略)すでに森は焼きはられ四時の生命感^{よしのり}は疾駆するフォードとともに人々から遠ざかり、荒城の月すら死んで…。(中略)メガロポリスの去勢的影響力に対し生新なる森の気の回復を願うものとして、この自称を採る。」創刊号表紙には William Blake「日の老いたる者」(1794)を使用。「シルヴァン」のなまえは同人の橘忠衛^{たちばなただえ}のアイデアではなかったかと鈴木五十鈴は記憶する。発足に先立ち東北大卒の田代幸造、間二郎らがおこなっていた輪読会が、シルヴァン同人会の前身である。創刊時の同人は22名、そのうち電話があるのは2名。「当時集まる場所がなくて苦勞している」といつも和泉町のお宅を提供して下さいました。本読みが終わった後しばしば

奥様の手作りのお料理をご馳走になった」と鈴木が語る時代はまだ戦後復興期で、まちは「ルノアール」とか「談話室 滝沢」のような長居できる喫茶店などあるはずもない。御茶の水のエスペラント学会(アテネフランセのそば)とか林信行の勤務する(目黒の)都立大の部屋を使わせてもらうか吉武の自宅で、太田三郎、臼井毅、林信行、大橋健三郎、飯田耕作らが輪読会に集った。吉武の自宅の和泉町は、現在の杉並区和泉。電話も合場所もろくになく、だけれど荒涼となどしていなかったと思う。創刊号巻末に、「1954年4月以来国際キリスト教大学にいられる田辺五十鈴嬢は、アメリカ留学から帰られた清新の気鋭をもって、フィッツジェラルド研究をつづけられ…」などとある同人消息もおそらく吉武の筆になる。

さて国東で育った吉武は、大分師範学校から広島高等師範学校卒業後[師範学校=教員養成の公立学校。ほとんどが現在の教育大学・教育学部の前身。大分師範の後身は大分大学教育福祉科学部]、大分県立国東高等女学校、長崎県立島原中学校に奉職。28歳、ややおそき^{あつお}で入学した東北帝国大学英文科で、英文学の土井光知、言語学の小林淳男^{あつお}の教えを受ける。卒業後、宮城県女子専門学校勤務を皮きりに法政大学、明治大学予科等を歴任し、千葉大学文理学部停年退官後の昭和41年(1966)に武蔵野女子大学に。昭和37年(1962) *The Study of 'Man' in Modern English Literature* で東北大学より文学博士(『現代英文学の人間像』として1966年研究社より上梓)。日本ホイットマン協会会長、日本英学史学会会長などを務める。

(著書)『文体論序説』(1937)、『明治・大正の翻訳史』(1959)。『翻訳事始』(1967)は、明治文化の解明の一つのアプローチを示す(高梨健吉評)。『近代文学の中の西欧——近代日本翻案史』(1975)は、翻案についての本格的・体系的な研究(瀬沼茂樹評)。『ホイットマン受容の百年』(1980)は、「50年にわたる著者のホイットマン研究の集大成」で、とくに集中第1部は米英の哲学者から評論家、編集者にいたるまでが「この詩人をどう見ていたかを実に克明に紹介…、まとめて英米人のホイットマン観が知れる貴重なもの」(『英語青年』1981年1月号、児玉晃一の書評)。(翻訳)R. スピラー『アメリカ文学の展開』(1957; 共訳)、『森・雪・男たち—ポール・バンヤン物語』(1961; 共訳)。『シルヴァン』3号のY・Y生「臭い臭い話」は、昭和31年(1956)9月～32年8月の米国留学中の、臭穫(?)。

ご夫婦で句を詠まれ、『吉武ゆり子句集』(1981年)、『吉武一柿句集』(1982年、500部限定、出版元 吉武淳夫)がある。淳夫はご長男で、後

者は歿年の出版ということになるが、淳雄氏による「刊行序」によると、どちらも吉武じしんで編んだもので、とりわけ前者は前年の妻歿後、編纂に全精力と愛情を傾けた。近隣では立川の国立国語研究所研究図書室が所蔵するのみで、全貌未見。以下に目次のみ記す——赤腹鶉^{あかばらづぐみ}／吉武一柿句集刊行序（吉武淳雄）／春・夏・秋・冬・新年／吉武好孝先生の生涯を辿って（鈴木保昭）／研究業績／おじいちゃんとの思い出（吉武和樹・瑞華）／『吉武一柿句集』なりたちの記（川崎宏）。昭和57年2月21日歿（81歳）。「英米フォトギャラリー」3頁。

昭和42年（1967年）*

（春季 第3回 講演会 6月17日）

講師＝佐伯彰一** 「アメリカ文学における『私』」（録音テープ ①OR）

（秋季 第4回 講演会）

講師＝大谷利彦***（演題不明）（録音テープなし）

* この年、静岡女子大学、茨城キリスト教大学、橘女子大学、梅光女学院大学などで英文学科が新規開設。大妻女子大学、京都産業大学、広島女学院大学などで、英文学科が増設（『英語青年』1967年4月号）。「大学生の急増で大学や短大は年々ふえ続け、ことしは62校増の821校に達している。…来年度は（中略）新設予定校90、増設予定65の計155校になるといわれている」（同誌1967年8月号）。

** 佐伯彰一 [大正11年(1922)～] 富山県出身。文芸評論家。持ち前の、米英文学・文化の視点からの日本文学・文化追究が、やがて『神道のこころ—見えざる神を求めて』（1989）などで神道の領域に踏み込んだのは、じしんの「（富山県の）立山信仰の担い手である佐伯一族の末裔のおひとり」[米山俊直「神道のこころ—その国際性」（国際宗教同志会平成10年度総会 記念講演）という出自なしにはあり得ないだろう。「子供のころは、気づかなかつたけれど、山深いわが村落^{あしくらじ}（芦峯寺）の正月の迎え方には、独特なものがあつた。立山信仰ということが、生活の中にしみ込んでいたに違いないが、宿坊の子供たちは、大晦日の晩に、開山堂にお籠りをした。（中略）東京の大学に進むころには、（中略）そうしたルーツは切り捨てようと努めた（後略）。…英文科といった、山屋育ちの少年には（中略）不向きという外ない選択をしたのも、（中略）古くさいわがルーツを断ち切るという気持ちが底で働いたせいには違いない」（「お正月の思い出」『神道のこころ』）。

昭和33年(1958)同人文芸雑誌『批評』(～昭和45)を興す。編集発行人が佐伯で、「遠藤周作、開高健、篠田一士、田畑麦彦、進藤純孝、日沼倫太郎、大久保典夫、野島秀勝、村松剛が中心メンバー」(『新潮日本文学辞典』)で、雑誌標題は吉田健一らの興した『批評』(昭和14年～24年)から受け継いだ。(著書)『内なるアメリカ・外なるアメリカ』(1971)、『日本人の自伝』(1974)、『近代日本の自伝』(1981)、『書いた、恋した、生きた—ヘミングウェイ伝』(1979)。(翻訳)『さようなら コロンバス』(1969)、『日はまた昇る』(1974)、『雨の王ヘンダソン』(1988)ほか。

[米山俊直の引用は(<http://www.relnet.co.jp/kokusyu/brief/kkouen4.htm>)による。]

*** 大谷利彦 [大正8年(1919)～平成21年(2009)] 福岡市生まれ長崎市育ち。(著書)『啄木の西洋と日本』(1974)、『長崎南蛮蚤情—永見徳太郎の生涯』(1988)、(翻訳)スティーブンソン『ジークル博士とハイド氏』(1963)ほか。「27歳で夭折した歌人石川啄木が、今日なお青春のシンボルとして人々の心を捉える理由は何か——この問いを課題として、著者は綿密な実証により啄木伝説のヴェールを^は剝いでゆく。(中略)『啄木とナポレオン』の章は圧巻で、未来の夢の中に明滅する巨人像として生涯ナポレオンに憧れていたことを諸方面から考案し、啄木の自意識のつよさ、自画自賛癖を美事に衝いている」は、井村君江による『啄木の西洋と日本』の書評(『英語青年』1975年5月号)。

以下は朝日新聞茨城版の記事——「正月半ばに、奥様からいただいた『寒中お見舞い』が3通もあった。仕事でお世話になった方々で、ご本人が昨年末に亡くなられていたのだ。武蔵野大名誉教授で文学者の大谷利彦さんもその一人だ。晩年、故郷の長崎市に住まわれた。奥様からのはがきには『昨年12月に亡くなりました』と書かれていた。90歳だった。初めて大谷さんにお会いしたのは盛岡だった。朝日新聞岩手版の詩の選者をお願いした。(中略)約35年、年賀状での交流が続いた。突然、昨年3月に手紙をいただいた。本を出したから送ると。電話では『土浦時代のことを書いたから』と元気な声で話された。(中略)本には『昭和24年に茨城大教育学部の専任講師に就任し、英語講読と演劇史を担当した』と書かれ、児童演劇での活躍が記されていた。土浦で母親を亡くされたとも。大谷さんは27年に土浦を離れ、盛岡一高に赴任した。その時の心情を『粉雪が舞う夜明けの駅にひとり降り立つとさすがに流離の思いにかられた』と書く。実は、私もその23年後、土浦から盛岡に夜行列車で赴任、思いは同じだった。ここ数年、年賀状の住所録から

思い出のある方の名が次々と消えていく」(土田芳孝「住所録から消える名前」『朝日新聞』茨城版、2010年2月2日)。平成21年12月5日歿(90歳)。「英米フォトギャラリー」5頁。

昭和43年(1968年)

11月:『武蔵野英米文学』創刊第1号刊行

(春季 第5回 講演会 6月20日)

講師=本間久雄* (演題不明) (録音テープ ②④ OR)

(秋季 第6回 講演会)

講師=山本幸男** (演題不明) (録音テープ ③ OR)

* 本間久雄 [明治19年(1886)~昭和56年(1981)] 早稲田大学名誉教授。山形県米沢生れ。昭和初年、弟子鈴木幸夫の記憶にある、早稲田に出講する本間は、「羽織・袴・白足袋で(中略)米沢の能役者の子というだけに、よく身についた着こなしで、当時和服で出講(されるのは)(中略)柳田泉先生もそうであった」(鈴木幸夫「孔雀のまぼろし」『英語青年』1981年10月号)。本間久雄は「坪内逍遙、島村抱月を慕って早大英文科に入学、明治42年卒業(中略)、ワイルドの研究に没頭した。『早稲田文学』『文章世界』などに評論を発表。(中略)昭和3年早大海外留学生として渡英。『滞欧印象記』はこの間の見聞感想録である。(中略)『英国近世唯美主義の研究』により文学博士となる。(中略)『明治文学史』の大著は、前人未踏の分野を、まったく著者独自の方法によって開拓した」(『増補改訂 新潮日本文学辞典』)。島村抱月の影響か卒業論文がワイルドで、「以来、死に至るまで父はワイルドの虜であった」と述べるのは、娘・高津久美子である(「小伝」『英語青年』1981年10月号<追悼本間久雄氏>。高津の夫は古代ギリシア文学の高津春繁)。

大正7年(1918)に早大講師、同時に『早稲田文学』の主幹を務めたがWildeへの思い断ちがたく、『早稲田文学』を一時廃刊にして英国に(昭和4、5年ごろ)。ロンドンでは、その頃Wilde書誌編纂者のStuart Masonが亡くなり、Masonの蒐集した膨大な“Wilde Collection”が古書肆Dulauから売りに出されたが、これを本間は直ちに購入。一足違いで来店した米国人の懇願を古書店主Dulauが固辞して、コレクションは本間文庫となった、というエピソードは有名。お礼であろうか、Masonの息子からWildeの遺髪を贈られた。1895年誹毀罪(名誉棄損)

により2年間投獄された Wilde の、獄中で書いた弁明の告白録 *De Profundis* が、本間の渡英当時ほとんど未公刊だったのを、大英博物館でぜんぶ筆写した。昭和56年(1981)6月11日歿(94歳)。

** 山本幸男 [(昭和6年(1931)～平成19年(2007)] 東京生まれ。昭和38年(1963)法政大学大学院博士課程修了。武蔵野女子大学学長(平成8年～11年)。「授業科目の中で聖書を読むことにしている。(中略) 聖書を読むことを教えて下さったのが本多顕彰先生だったという、それだけの理由で」と語る山本は、やがてカリキュラム改訂で出来た「キリスト教と英米文化」を講じる(「合掌・本多顕彰先生」『法政大学英文学会会報』13号、1979年)。

(論文・随想)「モーム文学の特徴」「モーム文学散歩 イギリス」「モーム文学散歩 南海諸島」(『英語研究』<モーム生誕100年記念>臨時増刊号、1974年)。(著書)『現代英国作家論——モーム、グリーン』(1972)。(講演)「ロビンソン・クルーソーの生活とキリスト教」(1994年10月21日 武蔵野女子大学公開講座「人間と宗教」)、「宗教と文学—英文学の場合」(1997年9月 武蔵野女子大学 日曜講演会)、「ミクロネシアの文化変容」(1999年5月16日 武蔵野女子大学 日曜講演会)。平成19年6月6日歿(80歳)。「英米フォトギャラリー」5頁。

12月:元短大文科英文専攻主任教授 梅谷興一歿。

昭和44年(1969年)

3月:文学部第1回卒業式

(春季講演会)(月日不明)

講師=大和資雄(教授)* 「シェイクスピアの史劇」

(録音テープ ⑤ OR)

(秋季講演会)(月日不明)

講師=鈴木五十鈴(助教授)** 「アメリカ文学に於けるユダヤ人作家」

(録音テープ ⑥ OR)

『英語青年』(1969年4月号)「研究誌掲載論文一覧」に『武蔵野英米文学』1号の記載。

* 大和資雄 [明治31年(1898)～平成2年(1990)] 山形市香澄町で生れ

る。生家は城生^{じょうの}といい、「累代 400 余年にわたる祖先の墓は鶴岡ホウガン寺〔鳳がん寺〕にある」という。一時川村姓となりふたたび城生に、それから大和という水戸に祖先のある家を継いだ。先代も「とにかく醸造業の平民ヤマトの養子」となった人物で、「大和の家の初代と称していたので、私は二代目ということになる。」生家の父親は羽前^{うぜん}(山形県)鶴岡の藩士。父のいとこ斎藤親広は高山樗牛の実兄。父方の祖母ギンは、ミラー夫人の伝道にみちびかれキリスト教信者であった(ミラー夫人は宣教師 Edward Rothersey Miller の妻でフェリス女学院創立者の Mary Eddy Kidder)。祖母が町をあるくと、「悪童どもが、ヤソ! ミソ! クソ! と声を揃えてあくたいをついた」と、子どもの大和は聞かされた〔耶蘇=イエス・キリスト。Jesus の近代中国音訳語「耶蘇」を音読みにした〕。祖母は石も投げられた。資雄 4 歳から一家が札幌に移転したのは、大通の目立つところに教会が佇立するような、明治末当時の<キリスト教徒の都市=札幌>の魅力が祖母を引きつけた、という事もあったらしい。息子夫婦もその子らも帰依させられたが、三男の大和は「反逆児の私」であった。教会は、「大通公園」東端のさっぽろテレビ塔よりやや西、大通西 3 丁目に 1894 年に建設され、会堂やね先端に風見鶏のかざりがあったため、当時市民から「鶏教会」とよばれた、現在の札幌北一条教会である(同教会 hp「沿革」による)。(三浦綾子は 30 歳のとき北一条教会の小野村林蔵牧師から洗礼をうけた。)宗派はピューリタンの長老派教会で、すくなからぬ宗教教育の痕跡を将来まで残した。父親がよる家族をあつめ聖書の輪読をするのにはうんざりし、長じては仏教に改宗もしたが、大和はキリスト教徒の兄二人よりも「かえって清教徒的な気質を余計に保有した」(「家庭教育の体験」『キッシンジャー氏とブランド氏』)。

以下略歴。札幌師範学校(後身は北海道教育大学)、東京高等師範学校[後身は東京教育大学(現、筑波大学)]、東京帝国大学英文科卒業。大正 14 年弱冠 27 歳で高野山大学教授、昭和 2 年日本大学予科教授、昭和 6 年から昭和 43 年の停年退職まで日本大学英文学科の教育に尽力。昭和 45 年(1970)より武蔵野女子大学教授。昭和 32 年(1957)『文学理論の体系づけにおける一つの試み』で文学博士(日本大学)。

(著書)『スコット』(新英米文学評伝叢書、1955)、(訳書)E. ブロンテ『嵐が丘』(1946)など著訳書多数。特にこの戦後の時期、「蜜柑箱を机に」研究・執筆・講義に精魂をかたむけ、カストリ〔戦後の質の悪い密造酒〕をのむひまもなかったと述懐する(「家庭教育の体験」)。昭和 53 年(1978)に歿した本多顯彰追悼文で、「長いおつきあいだが、淡々として水のごとき友人関係でした。イヌ年生れの同年でも、アヂソンとスチー

ルみたいに性格がちがいが、彼は愛知県の小学も中学も首席で優等生、ぼくは北国のぼんくらでした」(「老友の思い出」『法政大学英文学会会報』13号、1979年)など語り口は軽妙。だが、教室などで警咳に接した方々には、その「激しい気性」「独立自尊」が忘れられない。「授業は休まず、始めから終わりまできっちりなさり、遅刻や怠けを許さず、とりわけ傲慢不遜な態度は容赦されなかった」(原田公章「溢れる豊かさ」<追悼 大和資雄氏>『英語青年』1990年4月号)。また、「菌に衣をきせないするどいお言葉に、若い人びとの中には畏れをなす人も」いたが、そのような仮借のない評言は、「決して意地の悪いものではなく、純粹に学問的なもので、若い研究者の研究をのばして行きたいという、暖かいお心持が溢れていた」(出口保夫「先生の温顔を偲んで」『英語青年』同号)。温顔で辛口評言——、が武蔵野女子大でも変わらなかったことを1977年3年生だった斧田留美は本誌で証言する。ただし、<英学戯評>と<EIGO CLUB>の両欄で(『英語青年』1975年4、7月号)「西東山鬼」氏とくりひろげたような、読むものところが愉しまないはげしい論戦もあった。「英米フォトギャラリー」5頁。

** 鈴木五十鈴 [大正15年(1926)～] 東京都豊島区长崎に生まれ藤沢鶴沼に育つ。平成9年退職後、老人党・九条の会に参画し、護憲運動に挺進。とくに後半生、適時に世情に苦言を呈した——、「<悪貨が良貨を駆逐>川崎市麻生区 主婦・鈴木五十鈴さん」『守られないから[就職]協定をなくす』なんて、どこが『正論』ですか。『悪貨が良貨を駆逐』したのです。大学4年の課程を3年で取らせ、点数稼ぎのうまい、小さな人間を作って、企業にプラスになるのでしょうか。今、若い人たちはこの国はますますおかしくなると言っています。そういう日本にしておいて、またまた自分の会社の目先しか考えられない思慮の浅い人間ばかり作ってしまったら、日本の将来も本当に危ないと思います。(後略) (就職協定廃止についての投稿『毎日新聞』1997年4月26日)。

(著書)『現代アメリカ文学』(1958年、共著)。(論文)「フィッツジェラルドにおける富の意識」(『シルヴァン』1号)、「南部小説覚え書」(1)～(4)。(書評)「マッカラーズ伝決定版」(『英語青年』1976年1月号)は、Virginia Spencer Car: *The Lonely Hunter* (1975)の書評。曰く、「一切の<私小説的>いやらしさを含んでいない(中略)彼女の天賦の才能というか南部人の本質的教養を實に見事に浮彫りにして(中略)出色のもの。」(翻訳)E. ウェルティ「緑色のカーテン」、C. マッカラーズ『針のない時計』(1971)、『黄金の眼に映るもの』(1976)、J. スタインバック『創作日記——“エデンの東”ノート』(1976)、『いどにおちたぞうさん』(1978)

武蔵野英米文学

ほか多数。(ラジオ) NHK ラジオ第二 原書で読む世界の名作「金色の瞳に映るかげ」(平成3年4月～6月)で13回にわたってマッカーズ『黄金の眼に映るもの』を解説。(講演)『『風と共に去りぬ』と南部文学』(1997年 武蔵野女子大学公開講座「女性が見た英米の女性作家」グリーンホール)。ペンネーム 田辺五十鈴。「英米フォトギャラリー」5頁ほか。

昭和45年(1970年)

(春季講演会)

講師=刈田元司(上智大学教授) 「アメリカ文学と都市」

(録音テープ ⑦ OR)

(秋季講演会)

講師=清水隆(専任講師) 「ギッシング再評価の試み」

(録音テープ ⑧ OR)

大和資雄、日大から武蔵野女子大に着任。

昭和46年(1971年)

(春季講演会 6月14日)

講師=^{かしわぐら}柏倉俊三* 「シェイクスピアの女性」 (録音テープ ⑨ OR)

(秋季講演会 12月8日)

講師=甲斐寛美 「シェイクスピアの後期ロマンス劇について」

(録音テープ ⑩ OR)

『英語青年』(1971年5月号)「研究誌掲載論文一覧」に『武蔵野英米文学』2号の記載。

* 柏倉俊三 [明治31年(1898)～(歿年不詳)] 北海道大学名誉教授。山形県東田川郡羽黒町生れ。昭和2年東大英文科卒業。高岡高等商業学校(高岡高商、後身は富山大学経済学部)教授、第二高等学校(仙台)教授、東北大学講師をへて、昭和22年北大法文学部教授、のち文学部教授。のち学習院大学英米文学教授、相模女子大学教授[『人事興信録』42版(2003)による]。(著書)『北方の四季—風土と文学』(1960)、『ハドソ

ン』(1980)、『シェイクスピア史劇の古戦場』(1990)。(翻訳) N. ホーソン『トワイヌ・トールド・テールズ』(1958)、W. H. ハドソン『緑の館——熱帯林のロマンス』(1972)、T. E. ロレンス『知恵の七柱』(1971)は日本翻訳文化賞(昭和47年)。「立正大学6月8日に文芸講演会を開き、柏倉俊氏の「シェイクスピア・史劇・薔薇の戦争」を聞いた」(『英語青年』1968年9月号「英学消息」)。

昭和47年(1972年)

(春季講演会 6月3日)

講師=篠田^{はじめ}一士(東京都立大学教授)* 「英文学は面白くなくはない」

(録音テープ ①A OR)

(秋季講演会 12月7日)

講師=原仙作(専任講師)**

「イギリス文学における意識の流れ手法の成立と発展」

(録音テープなし)

* 篠田一士 [昭和2年(1927)~平成元年(1989)] 文芸評論家、都立大教授、柔道3段の巨漢。岐阜市湊町に生まれる。少年時、母・祖母の過保護と中学生間のきびしい友人関係の相克から喪失した自信を取りもどしたのは、柔道初段を許された14歳。16歳の四高受験 [旧制第四高等学校(金沢)] は不首尾。17歳(昭和19年)、旧制松江高校文科甲類入学。在学中のちに『ルバイヤート』や小泉八雲の翻訳で知られる森^{りょう}亮教授との出会いを「運命的な出会い」と篠田は語る [土岐恒二編「年譜」『世界文学「食」紀行』(2009)]。森教授から、「やはり、詩のありがたさということ(中略)、詩的言語のもつ、変幻自在なおそろしさ」[『現代詩人帖』(1984)]を学んだ。昭和26年東大英文科を卒業。都立第三商業高等学校英語教諭、都立商科短期大学専任講師をへて、昭和32年都立大学専任講師となったのは、「加納秀夫教授の強力な推挽による」(「年譜」)。東大を卒業した翌年、丸谷才一、川村二郎、菅野昭正らと同人雑誌『秩序』を創刊。「現代ヨーロッパ文学の清新な紹介と、広い視野に立つ審美的なエッセーによって注目された」(『新潮日本文学辞典』中の佐伯彰一による記事)。主著は『日本の近代小説』(1973)、『続日本の近代小説』(1975)、『日本の現代小説』(1980)の連作評論、『二十世紀の十大小説』(1988)ほか。食通ということだったが、『美食文学大全』(1979)、『世界

文学「食」紀行』(1983)などは、食品・食事・料理を切り口にした世界文学アンソロジーと見るべきである。「私小説」を一貫して排撃したが、根拠の一端は、「[戦前の]人生いかに生きべきかという大命題をふりかざした、自然主義から「私小説」にいたる文壇主流の作家たちには、小説の主人公、つまり、自分自身がなにを食おうが、そんなことは微々たる問題で、配慮にも値しない事柄だった」(「架空の珍料理・その2—谷崎潤一郎『美食倶楽部』』『世界文学「食」紀行』)という指摘に示されている。大晦日に采配をふるう眼力するどい主婦のような、じつに具体的な指摘ではないか。「なにしろ講義が終わるたびにラーメンをたべるんだからね…」(『朝日新聞』1989年4月21日夕刊「人・流れ雲」)は、急死後の追悼記事中の同僚の発言。「都立の小池さん!?!」と言われたかも知れなかったかも知れない。「小池さん」は知る人ぞ知る、『オバケのQ太郎』登場のラーメン中毒中年男。平成元年4月13日歿(62歳)。

** 原仙作 [明治41年(1908)～昭和49年(1974)] 昭和6年(1931)長崎高等商業学校(後身は長崎大学経済学部)本科卒業。卒業直後の同年3月から昭和21年5月まで龍山公立中学校(朝鮮総督府)教諭。40歳前まで朝鮮で過ごす。昭和21年5月、終戦引揚げのため自然退官(総務部人事課の記録による)。1988年発行の『龍山公立中学校創立七十周年記念誌』目次に、「原仙作先生と光州中学生」の回想記事が見える。以下、総務部の記録にしたがい略歴を記す。

米軍政長官付(ママ)通訳官兼参謀二課翻訳官(昭和20年9～12月)と記録にあるのは、米軍行政府長官であろうか。これも同年12月で引揚げ退職。昭和21年旺文社主幹、23年編集顧問。昭和25年～31年、開成高等学校講師。昭和31年以降、千葉大学工業短期大学部、明治大学、青山学院大学、実践女子短大で非常勤講師。昭和39年10月、旺文社派遣親善学生団長としてヨーロッパ各地を視察。昭和48年、武蔵野女子大学短期大学部教授に就任。

(編著)『米英新語辞典』(1949)、『英文標準問題精講』(1933)。旺文社社史には、「原仙作著『英文標準問題精講』を刊行。定価1円。現在新装5訂版のロングセラー」の記述がある。(大学教科書) Samuel Butler: *The Way of All Flesh* (生きとし生けるものの道) (1958)、『日本文学英訳演習』(1964)。昭和49年(1974)7月9日歿(66歳)。「英米フォトギャラリー」4頁。

(原さんの娘さんは私の教え子。原さんは若くして国家試験に通った。英語の、年に1人しかパスしない国家試験。旧制時代に、高校・大学卒でなくても英語教師になれる道。——鈴木建三先生談)「英米フォト

ギャラリー」4頁。

昭和48年(1973年)

(春季講演会 6月18日)

講師＝古谷専三(帝京大学文学部長)*

「George Eliotの描いた女性たち」(録音テープ ⑩-B OR)

(秋季講演会 翌1月14日)

講師＝山口弘恵(専任講師)**

「十九世紀のイギリスとブロンテ姉妹の世界」(録音テープなし)

4月:前年度卒業の久保田珠江・谷京子(旧姓＝高橋)、副手に。

* 古谷専三 [明治27年(1894)～平成3年(1991)] (著書)『古谷メソッドによる初級英語入門』(1950)、『ジョージ・エリオット研究』(1966)ほか。「昨年(1966年)の11月に出た『ジョージ・エリオット研究』は、『ミドルマーチ市』についても(中略)前人未踏の研究をふくんでいるが、著者の古谷専三さんは、日大を70まで定年延長されて退職後、新設大学の英文科を創設し、そこの文学部長となって、益々元気(中略)。72歳の新人は新生社から『文学/わが放談』を出し(中略)中には放談もあるが、(中略)「長塚節のこぼろぎの歌」などは立派な鑑賞で(中略)肩の凝らない論考。(中略)11月19日の夕は計らずも古谷さんの出版祝いの会となり(中略)百余名集まっていた」(大和資雄「永遠の青年」『英語青年』1967年2月号随想)。

** 山口弘恵 [昭和8年(1933)～] 昭和8年(1933)中国旧満州撫順^{ぶしゆん}市生まれ福島県会津若松育ち。武蔵野女子学院短期大学を卒業、法政大学、法政大学大学院修士課程修了。武蔵野女子大学教授を長く務め、平成16年(2004)3月同大学を定年退職。

(著書)『アン・ブロンテの世界』(1992)、『女たちの英米文学シスター——タカラヅカから映画まで』(2004)、『ヒースの丘から——友、旅、暮らしの歳時記』(2009)。(翻訳)『ワイルドフェル・ホールの住人』(1996)。(講演)「ブロンテ姉妹のヒロインたち」(1997年 武蔵野女子大学公開講座 10月11日 グリーンホール)、「イギリス小説のヒロインたちから学ぶ現代女性の生き方」(1998年 武蔵野女子大学公開講座 10月17日リーガロイヤルホテル広島)。

昭和 49 年 (1974 年)

(春季講演会 6 月 17 日)

講師＝福田陸太郎 (東京教育大学教授)*

「アメリカ現代詩の一面——想像と現実」 (録音テープ ⑫ OR)

(秋季講演会 12 月 9 日)

講師＝井上寿子 (助教授)** 「フォスターに求めるもの」 (録音テープなし)

* 福田陸太郎 [大正 5 年(1916)～平成 18 年(2006)] 石川県羽咋市^{はくいし}生れ。昭和 61 年(1986) 1 月 8 日宮中行事「講書始」で「比較文学の進展について」昭和天皇らにご進講 (朝日新聞 2006 年 2 月 9 日朝刊)。(著書)『アメリカ文学の肖像』(1949)、『アメリカ文学名作選』(1972; 編著)、『比較文学の諸相』(1980)、『詩と詩論』(1998)。(翻訳)ヘミングウェイ『移動祝祭日』(1964)。平成 18 年 2 月 4 日歿 (89 歳)。

** 井上寿子 [大正 15 年(1926)～平成 19 年(2007)] 東京生れ。旧制鹿児島県立女子専門学校英文科卒(後身は鹿児島県立短期大学)。鹿児島実践女子高等学校 [昭和 26-30 年(1951-55)]、東京学園 [昭和 30-37 年(1955-1962)] で教壇に(非常勤)。昭和 40 年(1960)武蔵野女子大学短期大学部専任講師。(専門分野)20 世紀イギリス文学、E. M. Forster 研究。(著書)「E. M. Forster のヒューマニズムについて」『英米の文学と文化』(1998; 共著)。(論文)「E. M. Forster の社会的観点について」「知識人の挑戦：E. M. Forster の場合」「或思考の行方：Culture and Anarchy への一私見」。平成 19 年(2007)8 月 14 日歿 (80 歳)。

昭和 50 年 (1975 年)

委員：大谷利彦・井上寿子・甲斐寛美 事務担当：大貫幸子

(春季講演会 6 月 24 日)

講師＝小田島雄志 (東京大学助教授) 「私のシェイクスピア」

(録音テープ ⑬ OR)

(秋季講演会 翌 1 月 20 日)

講師＝野崎晴雄 (専任講師)

「同格——表現形式と表現内容のかかわりあい」 (録音テープなし)

法政大教授を辞し板倉保、ふたたび武蔵野女子大教授に。

昭和51年(1976年)

委員：井上寿子・甲斐寛美・山口弘恵 事務担当：松井由理

(春季講演会 6月2日)

講師＝浜本武雄(明治大学教授)* 「黒人文学の今昔」

(録音テープ ⑭ CT)

(秋季講演会 12月2日)

講師＝板倉保(教授)** 「ヘミングウェイの女性観」

(録音テープ ⑮ CT)

* 浜本武雄 [大正14年(1925)～平成15年(2003)] 神戸市生れ。1996年まで明治大学教授。昭和42～43年(1967～68)、American Council of Learned Societiesの基金により、Yale大にて「アメリカ現代文学における主題と形式」及び「アメリカ黒人文学」を研究のため、6月12日、東京羽田を出発(『英語青年』1967年8月号)。(訳書)『マルコムX自伝』(1993;完訳)、B.マラマッド『レンブラントの帽子』(1975;共訳)。(共編、解説)『橋本福夫著作集』(1989)。(共編訳)『黒人文学全集』(1961～68)。2003年6月13日歿(78歳)。「英米フォトギャラリー」3頁。

** 板倉保 [昭和2年(1927)～平成20年(2008)] 香川県小豆島出身。法政大学大学院修士課程人文科学研究科英文学専攻修了、文学修士。(専門分野)アメリカ文学。(論文)「Joan Didion's *Play It As It Lays* —— 成熟社会における不安とその超克への試み」ほか。「英米フォトギャラリー」1頁ほか。239頁、囲み記事参照。

昭和52年(1977年)

委員：山口弘恵・山本幸男・矢崎正夫 事務担当：松井由理

(春季講演会 6月8日)

講師＝近藤いね子(津田塾大学教授・文学博士)*

「ジェイン・オースティンとプロンテ姉妹」 (録音テープなし)

(秋季講演会 11月2日)

司会＝吉武好孝

講師＝アンソニー・ファリントン(日本文化研究家・インディア・オフィ

ス・ライブラリー副館長)** 「英国における日本研究」

(録音テープ ⑩ CT)

翌3月末日：吉武好孝 定年退職、ひきつづき非常勤講師で出講、帝京大にも。

* 近藤いね子 [明治44年(1911)～平成20年(2008)] 神奈川県秦野^{はだの}生まれ。「1935年東北帝国大学英文科卒業、1939年ケンブリッジ大学大学院修了。津田塾大学名誉教授。著書『イギリス小説論』(1947)、『英国小説と女流作家』(1955)など。訳書 夏目漱石『こころ』(1941; 英訳)、ジェイン・オースティン『説得』(1969)、ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』(1976)、『存在の瞬間』(1983; 共訳) (みすず書房 hp より)。1971年5月に「近藤いね子還暦祝賀会」が開かれ、後日、「足早に近づいてくる老年をこれ程強烈に(神経衰弱で自殺する米詩人ランダル・ジャレルのように)意識し、苦悩することはないし、また、青年として前進すると言いつつ Forster の心意気もない。八百屋や魚屋でおばあさんと呼ばれることにも慣れた」と感懐を述べている。(「還暦」『英語青年』1971年9月号随想) 平成20年歿(97歳)。

** Anthony John Farrington [生年歿年不詳] 「1 昨年日本英学史学会で知遇を得たのを機に India Office Library & Records 副館長の Farrington さんが、我われの日本英学史学会の招聘で来日、多くの大学で講演。専攻は16～17世紀のアジアに対するヨーロッパの侵入、東インド会社、William Adams (三浦按人)、1860～1910の日本に関する英語の著作の研究等」(吉武好孝による紹介)。「India Library にライブラリアンとして勤めた Thomas Carlyle、James Stuart Mill 親子、Charles Lamb らはその恩給で作家生活。日本に関する資料は British Museum より多い、英国の図書館で古文書館。吉武さんのちからでお呼びし British Museum が応援した。2ヵ月滞在され各地図書館で、英文で書いた日本資料をコレクトして居られる。Farrington さんの英語は Ford 大統領よりずっときれい」[非常勤講師 池田哲郎 (1902～1985) による紹介] (講演テープより抜粋)。Farrington は、インド・パキスタン・スリランカ・ビルマ・マレーシア・シンガポール・インドネシア・タイ・ヴェトナム・中国・日本等アジアを広くに直撃経験。

(著書) *Sir William Foster: A Bibliography* (1972), *The English Factory in Japan 1613-1623* (1991), *The English Factory in Taiwan 1670-1685* (1995), *The East India Company and Asia 1600-1834* (2002) など。

昭和 53 年 (1978 年)

委員：山本幸男・矢崎正夫・大谷利彦 事務担当：松井由理

(春季講演会 6 月 5 日)

講師＝大橋吉之輔 (慶應義塾大学教授)* 「アメリカ文学へのアプローチ」

(録音テープ ⑩ CT)

6 月 30 日(金)：元英米文学科主任教授 本多顯彰 死去

通夜：同日午後 7 時～ 築地本願寺 和田堀廟所

告別式：7 月 1 日(土) 午後 2 時～ 3 時 同所

(秋季講演会 11 月 22 日) 414 番教室

講師＝矢崎正夫 (専任講師) 「ソール・ベローについて」

(録音テープ ⑪ CT)

* 大橋吉之輔 [大正 13 年(1924)～平成 5 年(1993)] 広島県生れ。慶應
大学教授。(編著)『アンダソン』(20 世紀英米文学案内 8) (1968)。(翻
訳)『ナット・ターナーの告白』(1970)、『ゼルダ——愛と狂気の生涯』
(1974) ほか。

昭和 54 年 (1979 年)

委員：大谷利彦・清水隆・君島邦守 事務担当：松井由理

1 月：『武蔵野英米文学』11 号完成

(第 13 回総会・春季講演会 6 月 25 日) 414 番教室

挨拶＝板倉保 会計報告＝君島邦守

講師＝尾崎^{やすし}安 (青山学院大学教授)* 「T. E. Hulme と 20 世紀英文学」

(録音テープ ⑫ CT)

(秋季講演会 11 月 28 日) 414 番教室

講師＝君島邦守 (専任講師)** 「Samuel Johnson について」

(録音テープ ⑬ ⑭ CT)

12 月 17 日：『武蔵野英米文学』12 号完成

* 尾崎安 [大正 11 年(1922)～歿年不詳] 「大谷先生の 40 年来の(大谷

先生から見ての)悪友。大谷先生はあらゆる点において先輩。1つだけ同じだったのは、学生時代外人教師ミス・ワトキンズの授業は英会話でなくリーディング。物語を毎時間読まされる厳しい先生。厳しい試練を経て大谷先生と私だけが満点、これだけは私も大谷先生に負けなかった(講演テープより抜粋)。

** 君島邦守 [昭和20年(1945)～58年(1983)] 昭和39年(1963)宇都宮高等学校卒業、昭和45年東京大学文科3類入学、45年5月卒業、昭和45年(6月)～昭和49年(1月)、キャタピラー三菱(株)勤務。昭和49年、東京都立大学大学院修士課程入学、51年、修了。昭和51年、都立大学人文学部助手。昭和53年4月、武蔵野女子大学専任講師。

「君島さんはよく読めるひと。クラリッサを修士論文に書いた。」は都立大(大学院)の師匠鈴木建三先生による回想。「あんなにあるクラリッサを」と手を広げて言われるのは、Samuel Richardson (1689-1761)の書簡体小説 *Clarissa, or the History of a Young Lady* (1748-49) 全8巻。付け焼刃の蛇足ながら *Clarissa* は、「英語で書いた小説のうちの最長篇」(齋藤勇『イギリス文学史』)、「長さゆえに読むよりも賞賛されることが多かった」(*Oxford Companion to English Literature*)。以下さらに師匠は回想する——ものすごく謙虚な君島さんが、たぶん加納(秀夫)さんが荒れたとき、<殿ご乱心!>と。その君島さんの訃報を事務からうけて五十鈴が、「ばか言うんじゃない、昨日私が会った!」と電話のぬしに言った。東女に1年いた。授業がぜんぶ英語だったから——。昭和58年歿(38歳)。

(翻訳) コリン・ウィルソン『覚醒への戦い』(1981; 鈴木建三と共訳)、J.B. プリーストリー『英国のユーモア』(1982; 共訳)。「英米フォトギャラリー」7頁。

昭和55年(1980年)

委員：清水隆・君島邦守・山口弘恵 事務担当：松井由理

(第14回総会・春季講演会6月20日) 516番教室

司会＝板倉保 会計報告＝君島邦守

講師＝井上謙治(明治大学教授)* 「現代アメリカ小説」

(録音テープ ②CT) 一般的に録音不良

(秋季講演会11月14日) 414番教室

講演1. 講師＝甲斐寛美(助教授)** 「帰国報告—イギリス留学を終えて」

2. 講師＝ G. R. Pohan(助教授)*** 「Women of Ancient Greece」

通訳：安田桃子

(録音テープ ㊸㊹CT)

6月25日：ISSN(国際標準逐次刊行物番号)の登録番号取得

国際標準逐次刊行物番号 ISSN 0388-6662

キー・タイトル(登録書名) Musashino Ei-Bei bungaku

7月8日：記録ノート「英文学会：メモ」に「『英語青年』『片々録』」に投稿の記述。****

12月8日：『武蔵野英米文学』13号完成

* 井上謙治 [昭和4年(1929)～] 昭和50年(1975)3月、米国国務省のExchange Visitor's Programにより1ヵ月間、米国各地を旅行(『英語青年』1975年5月号「個人消息」)。(著書)『アメリカ読書ノート』(1991)、『アメリカ読書雑記』(1993)。(翻訳)I. B.シンガー『奴隷』(1975)、J. アップダイク『帰ってきたウサギ』(1973)、『さようならウサギ』(1997)、F. S.フィッツジェラルド『ジャズ・エイジの物語』(1981)、J. スタインベック『キャナリー・ロウ』(1989)、レイルズバック & マイヤー『ジョン・スタインベック事典』(2009)ほか多数。(発表)「60年代以後のアメリカ小説」日本英文学会48回大会(1976)シンポジウム講師。(エッセー)「兵隊文庫の思い出」(官報『日本近代文学館』241号)、『文学空間』同人。昭和48年以降長年にわたり英米文学科非常勤講師、「英作文」「英文演習」「翻訳演習」等担当。「英米フォトギャラリー」6頁ほか。

** 甲斐寛美 [昭和10年(1935)～] 甲斐助教授(当時)は、昭和54年に出来た武蔵野女子大学海外留学制度(長期・短期)利用の第1号。大分県生れ。青山学院大学英米文学科卒。明治学院大学大学院博士課程修了。昭和42年(1967)武蔵野女子大学短期大学部専任講師。

(論文)「提督劇団のレパトリー・システムについて」『文学研究科英文学専攻十周年記念論文集』(1966; 明治学院大学大学院)。(翻訳)「ブラッドリーの『ヘーゲルの悲劇論』」『武蔵野英米文学』22号、ファーマー『ドラマの境域』(1998; 共訳)。(発表)「シェイクスピア劇と観客」(昭和42年(1967)10月シェイクスピア学会)、「シェイクスピアのロマンス劇——個かジャンルか」(昭和53年(1978)10月シェイクスピア学会)。「英米フォトギャラリー」6頁。

*** G. R. Pohan (Geraldine Ruth) [大正8年(1919)～平成10年

(1998)] (1925年) オハイオ州トレッドチェリースクール、(1933年) 同卒業、(1933年) オハイオ州トレッドスコットスクール、(1936年) 同卒業、(1937年) ニューヨーク大学、(1941年) 同卒業(ここまで総務部人事課の記録)。トレッドチェリースクールはおそらく、Ohio州北西部、五大湖の1つ Erie湖の南西岸にそそぐ Maumee河に面した Toledo市の、Cherry Elementary School(現在)ではないかと思われる。また2番目のトレッドスコットスクールは、同市の Scott High School と思われる。以下ふたたび人事課の記録によると、(1942-43) ニューヨーク都市センター成人教育、(1944-48) ニューヨーク株式取引所プエルトリコ移民援助協会、(1950-51) インドネシアジャカルタカルテックス石油会社、(1951-59) シンガポール婦人援助協会、(1966-67) 法政大学非常勤講師、となっている。それぞれの職場での詳細は不明、3番目のインドネシアのは、Caltex という石油会社が今もあるようだ。その後、昭和42年(1967)に武蔵野女子大学専任講師に。

(論文) “Are Greek and Latin Necessary?”(1977), “A Pot-pourri of Classical Studies”(1978), “Oenone”(1979), “Prometheus”(1980), “Dionysus”(1981), “Cleopatra”(1983), “Nemesis”(1985), “Aesop”(1986), “Virgil”(1988)。(校閲) 石川敏男編『世界人名・地名表記辞典—英・独・仏・伊・西・日語対照—』(1983) (石川敏男は元英米文学科の非常勤講師)。平成10年(1998)6月8日歿(79歳)。「英米フォトギャラリー」6頁ほか。

講演の通訳・安田桃子はNHK同時通訳者。

**** 『『英語青年』に投稿』と記録ノート「英文学会：メモ」にあるので、7月以降の「片々録」を探したが、その頃の「片々録」に『武蔵野英米文学』関連の記事見当たらず。実情は、『武蔵野英米文学』ISSN取得の旨を「片々録」に投稿、採用されずの模様——元助手・(現)むらさき会久保田委員による。

昭和56年(1981年)

委員：鈴木五十鈴・矢崎正夫・君島邦守 事務担当：松井由理

(春季講演会6月22日) 414教室

講師＝加納秀夫(元都立大学教授)*

「ワーズワースの詩の一面について」 (録音テープ ㊟CT)

(秋季講演会11月20日) 414教室

講師＝須長桂介（専任講師） 「ボードレールとエドガー・アラン・ポー」

（録音テープ ㊸CT）

* 加納秀夫 [明治 44 年(1911)～平成 15 年(2003)] （著書）『イギリス浪漫派詩人』（1951）、『英国ロマン派の詩と想像力』（1978）、『ワーズワス』（新英米文学評伝叢書、1955）。（翻訳）R. W. エマソン『英国の印象』（1948）、M. ラウリー『活火山の下』（1966）。

後出サッカー戦中継の「加納秀夫氏のライズマンという豪華な顔触れ」（230 頁）はなんとなく巨体を想像させる。たしかに大柄な方だった——、「大きなお体で陽気に酒を」（東條賢一）、「長身の白髪、…イギリス人風目鼻立ち、そして鷹揚な物腰の『年配者』（大熊栄）、「巨木が倒れた」（沢崎順之助）、「やたら背の高い」（鈴木建三）、「長身で肩幅が広く…、背広がよく似合う中年の紳士」（土岐恒二）（『英語青年』2004 年 1 月号 <追悼・加納秀夫氏>）等々。

広島市出身。昭和 3 年(1929)、(旧制) 広島高等学校(通称=広島)文科甲類(甲類は英語を選択)入学。勉学のかたわらボート部で活躍された由、詳細不明。東京帝国大学英文科 2 年生のとき、同級の平井正穂、尾上政次、八木毅らと創刊した同人誌『オベロン』は、星霜を経て今日まで脈々とつづいている(現在は *Oberon*)。昭和 16 年(1941)から教鞭をとった(旧制)武蔵高等学校教授時代の加納の薫陶をうけた(元)都立大の小野茂には、「<暗唱じゃ>で始まる」加納の情熱的な授業が、60 年後も脳裡にこびりついてはなれない(小野茂「師としての加納さん」)。ほぼ同じ時期に武蔵高校にいたもう 1 人の生徒は、昭和 19 年ごろ生徒らの求めに応じた加納が、教室で太平洋戦争のゆくえについて、「英米に勝つか負けるかの問題ではない。どちらの人間が優れているかが問題なのだ」とすらすらと言い放つのに感動をおぼえた。「敵が来たら降参することばかり考えて」軍隊がいやでたまらない、生意気ざかりの中学一年生は、いっきに先生が好きになった(鈴木建三「加納先生の憶い出」)。(ちなみに小野茂も鈴木建三も、滞英 3 年におよぶ中世英文学の勉学をおえて昨秋帰国した末松良道の、都立大大学院時代の師匠である)。渋谷などの酒席で、長幼のへだてなく文学論を戦わす磊落な加納のすがたは、「学生に対等の議論を当然のように期待して、共通の話題と同好の士を待望するひとりの文学愛好家にして文学研究家」だった。しかし時には突然に口調が怒気をおびる。「議論の相手が否定的言辞で詩人作家を評する場合の、その(中略)舌鋒が、両刃の剣のように論者自身の内面にも切り込んで行かない、高みの批評と先生に映ったとたんに、抑制心が切れて

武蔵野英米文学

しまう」と追想するのは土岐恒二。戦前からの広島人らしく「オーライ、大丈夫だ」だとか「暗唱じゃ」だとかが加納の口癖だった。平成 15 年 9 月 2 日歿(92 歳)。

12 月 17 日：『武蔵野英米文学』14 号完成

翌 1 月：『武蔵野英米文学』合本制作 1～5 号 3 冊、6～10 号 3 冊

翌 2 月 21 日(日)：元英米文学科主任教授 吉武好孝 午前 2 時 12 分、脳出血のため調布市調布病院で死去 (81 歳)。

通夜：2 月 22 日(月) 国分寺市自宅

密葬：2 月 23 日(火) 同所

告別式：2 月 28 日(日) 正午 西国分寺 東福寺

昭和 57 年(1982 年)

委員：鈴木五十鈴・矢崎正夫・須長桂介 事務担当：松井由理

(春季講演会 6 月 16 日) 414 番教室

講師＝木島始 (法政大学教授・詩人)* 「ことばと芸術」

(録音テープ ②7CT)

(秋季講演会 11 月 12 日) 414 番教室

講師＝山口弘恵 (助教授) 「英語・イギリス・ブロンテ姉妹」

(録音テープ ②8CT)

12 月 25 日：『武蔵野英米文学』15 号完成

翌 2 月 21 日(日)：元英文科主任教授 齋藤和^{おいち}一 死去(95 歳)**

通夜：2 月 23 日(水) 中野区自宅

告別式：2 月 24 日(木) 青山葬儀場

翌 3 月：『武蔵野英米文学』合本制作 11～15 号 3 冊

* 木島始 [昭和 3 年(1928)～平成 16 年(2004)] 京都市生れ。本名小島昭三。「主体的立場を見失ったプロパガンダ詩をいっせいに書きまくったことへの苦い反省」もあり「個としての人間の全体性、その尊厳と自由に対する希求」から「ささやかだが真にかけがえのない自我の拠り所としての『詩』」を求めて創刊されたのが、『荒地』『列島』などの戦後

詩第一陣の同人詩誌である（大岡信『新潮日本文学辞典』〈現代の詩〉の項目）。木島は『列島』に参加、『木島始詩集』を昭和28年に刊行した。ほかに『列島詩人集』（1997）、『新木島始詩集』（2000）、『新々木島始詩集』（2003）などがある。評論集『詩・黒人・ジャズ』（1965）。（翻訳）『ラングストン・ヒューズ詩集』（1993）、ナット・ヘントフ『ジャズ・カントリー』（1966）。イラク戦争時、詩人石川逸子らと反戦詩集作りの呼びかけをした（『朝日新聞』2003年4月16日朝刊「小泉首相へ反戦詩集」）。平成16年8月歿（76歳）。

** 斎藤和一 [明治20年(1887)～昭和57年(1982)] （以下総務部人事課の記録を再録）明治41年早稲田専門学校中退（東京専門学校の間違ひと思われる）。明治42年渡米留学。大正4年南キヤルホルニア大学卒業、パチエラー・オブ・アーツの学位を受く（文学・歴史専攻）。大正7年シカゴ市シカゴ大学院マスター・オブ・アーツの学位を受く（社会学専攻）。大正12年帰朝。大正14年ジャパントイムス記者。大正15年東洋協会大学（拓殖大学の前身）英語講師として奉職。昭和5年拓殖大学教授。昭和20年同大学学生部長。昭和24年拓殖大学附属高等学校長。昭和30～36年政経学部長。昭和42年武蔵野女子大学教授。昭和57年歿（95歳）。「斎藤和一教授 最終講義 録音カセットテープ」がある（要修理）。「英米フォトギャラリー」3頁。

昭和58年（1983年）

委員：須長桂介・井上寿子・野崎晴雄 事務担当：松井由理

（春季講演会6月27日）536番教室

講師＝鈴木建三（都立大学教授）* 「パロディについて」

（録音テープ ㊸CT）

9月13日（火）：元英米文学科専任講師 君島邦守 死去（38歳）

通夜：9月14日（水）多摩市自宅

告別式：9月15日（木）同所

（秋季講演会11月28日）412番教室

講演1. 講師＝清水隆（教授）「ロンドン1人ぼっち」 （録音テープ ㊹CT）

2. 講師＝大谷利彦（教授）「長崎と欧米文化」 （録音テープ ㊺CT）

12月28日：『武蔵野英米文学』16号完成

* 鈴木建三 [昭和4年(1929)～] 都立大学人文学部名誉教授、元青山学院大学文学部教授。武蔵野女子大学で平成10年ごろから数年非常勤講師を。(論文)「George Orwell 論——諷刺作家の形成」「コンラッド覚え書」「アラン・シリトーをめぐって——労働者作家の弱味と強味」ほか。(著書)『絶望の拒絶——ジョージ・オーウェルとともに』(1995)。(評論・解説)「アラン・シリトーの新作 *The Death of William Posters*」。(連作エッセイ)「妄人妄語」その1～21(『英語青年』1996年7月号～1998年3月号)。あわせて『妄人妄語』(その8)に関する編集部への公開書簡(同誌1997年6月号)を読むとよい。(翻訳)J.コンラッド『ロード・ジム』(1978)ほか。

1968年6月16日(日)開催の「英文学的サッカー戦」(都立大=レ・ガルズ vs. 国学院大=レ・ミゼラブル)の実況が「工藤—鈴木(建)—板津—(中略)がセンタリング(後略)」と報じられている(『英語青年』1968年9月号「片々録」)。東大 vs. 東京教育大の「英文学的野球戦」の向うを張ったものと推測される。つぎの実況生中継は4年後の5月3日(水)(同誌1972年4月号 EIGO CLUB)、都立大グラウンドから。以下同記事から抄録。「試合は45分制(前半15分、休憩15分、後半15分)、(中略)加納秀夫氏のライズマンという豪華な顔触れで脇を固め、(中略)都立大が試合の主導権を握り、(中略)後半にはいって、国学院は(中略)反撃に転じ、(中略)CFの田野がゴールを蹴りこんで同点に持ちこんだが、しかし国学院の反撃もそこまで、以後は都立大の今井、忍足、鈴木(建)らに思うように走られ、(中略)こぼれ出たボールを忍足が押しこんで決勝点とした。(中略)試合終了後、中華料理店「都市飯店」で午餐会、(中略)金色燦然たる中島文雄杯はそのまま、めでたく都立大英文研究室に。」いまでも夜中までテレビ観戦するほどの鈴木(建)のサッカー歴は、大泉(練馬区)の小学校時代にさかのぼる。クラスは45人いて、11人×4チームで、どうしても1人あまるのがレフェリーになる。それがいちばんへたくそな鈴木少年だった。ゴールには棒が2本立っていた(ご本人談)。

また同誌1976年10月号の「英学戯評」>「納涼・英文学的海外旅行」は、別府温泉につかり過ぎ湯あたりでもしたか、「不幸な旅人」が編集部に提案する酔狂な海外旅行案内。「(引率の)先生方も退職金や恩給を減さないで海外に行ける(中略)こういう学者に引率されて海外に行ける人たちは(中略)日本一の幸せ者」だそうで、●中野好夫：アラビヤのロレンス・コース、北朝鮮経由、右翼及び全共闘のハイジャックの

恐れあり。(後略) ●大橋吉之輔：建国 201 年アメリカ全州めぐり、ただしカーキチに限る。●大山俊一・敏子夫妻：「ロメオとジュリエット」アベックコース、ただし大学院博士課程の学生に限る。●鈴木建三：オーウェル・コース、パリ、ロンドン耐乏生活の予定、栄養失調のおそれあり。ただし説明カイジュウ。(後略) ●刈田元司・高村勝治：ロングアイランド・コース、地名などに誤りが多いので、各自注意のこと。なおそれでも心配なむきは、次の●西川正身：ウィッチ・コース、ニューイングランド古蹟巡礼、にくらがえも可」だそうだ。上記オーウェル・コースの詳細は、岩波文庫『パリ・ロンドン放浪記』(*Down and Out in Paris and London*, 1933) を御覧ください。「英米フォトギャラリー」11 頁。

昭和 59 年 (1984 年)

委員：井上寿子・野崎晴雄・佐藤晴雄 事務担当：松井由理

(春季講演会 6 月 20 日) 414 番教室

講師＝金関寿夫 (駒澤大学教授・前アメリカ文学会会長)*

「文学をなぜ読むか」

(録音テープ ②CT)

^{かなせきひさお}
* 金関寿夫 [大正 7 年(1918)～平成 8 年(1996)] 同志社大学英文科卒。エール大等に留学、神戸大、都立大、駒澤大など歴任。コロンビア大客員教授も。「ヒッピーやインディアンの詩人との交流を通し、米国の先住民文化や絵画研究にも造詣が深かった」(『朝日新聞』1996 年 9 月 24 日朝刊「金関寿夫氏死去」)。G. スタイン『アリス・B・トクラスの自伝』(1971) 翻訳を契機に、『三人の女』(1969) を翻訳した詩人富岡多恵子と「スタイン・ファンクラブ」を創始(「片々録」『英語青年』1971 年 11 月号による)。(著書)『アメリカ・インディアンの詩』(1977)、『ナヴァホの砂絵』(1980)、『異神の国から——文学的アメリカ』(1990)、『現代芸術のエポック・エロイク——パリのガートルード・スタイン』(1992 年 43 回読売文学賞 随筆・紀行賞)。(翻訳)アメリカ先住民の詩を集めた『おれは歌だ おれはここを歩く』(1992; 秋野玄左 絵)。「金関寿夫さんという力強い翻訳者があって『百代の過客』はできた」は、金関訳の『百代の過客』で 1985 年日本文学大賞・読売文学賞(評論・伝記賞)を受けたドナルド・キーンの辞。6 月 20 日の講演終了後、2 号館英文研究室でしばし歓談、さあ帰って息子にスパゲッティを作らねばと夕刻大学

を後にされた。平成8年歿(78歳)。

(講演会 11月27日) 412番教室

講師=佐藤晴雄(専任講師)「マーク・トウェインの欧州紀行について」

(録音テープ ㊸CT)

板倉保教授 在外研究(米国)

昭和60年(1985年)

委員:佐藤晴雄・板倉保・大谷利彦 事務担当:松井由理

(春季講演会 5月31日) 414番教室

講師=君塚寿満子(南カリフォルニア大学名誉教授・教育学博士)

「アメリカにおける生活と言語」

(録音テープ ㊹CT)

翌1月14日:『武蔵野英米文学』18号完成納品

昭和61年(1986年)

委員:板倉保・大谷利彦・甲斐寛美 事務担当:松井由理

(春季講演会 6月23日) D101番教室

講師=品田雄吉(映画評論家)* 「アメリカ映画とアメリカ文学」

(録音テープ ㊺CT)

* 品田雄吉 [昭和5年(1930)～] 映画評論家、多摩美術大学名誉教授。北海道天塩郡遠別町^{えんべつちよう}生まれ。北大文学部国文科卒。跡見学園女子大学、聖心女子大学、武蔵野女子大学等講師。『キネマ旬報』『映画評論』の編集者からフリーの映画評論家に。

(著書)『監督のいる風景』(1986)、『銀幕の恋人たち』(1988)、『KADOKAWA 世界名作シネマ全集<第5巻> ザッツ・エンターテインメント「雨に唄えば」「ウエスト・サイド物語』』ほか全24巻監修(2005～2007)。『シネマの記憶から——名優・名監督と映画評論家の五十年』(2008)は、そんな新聞記事もあった事を思い出させる——、「泉佐野市で、映画祭が催され(中略)ゲストとしてジョージ・チャキリスがやってきた。(中略)あの『ウエスト・サイド物語』の、プエルトリコ系の不良少年団グループ<シャーク団>のリーダー、ベルナルドを演じたチャキリス。(中略)なんと、チャキリスのトーク・ショーの聞き手の役が私に回ってきた。(中略)ゆったりした雰囲気の良い会だった。

(中略)と、お客さんの一人が、『あのう、脚を上げていただけませんか』(中略)チャキリスは、すでに六十歳を超えていたはず(中略)笑顔で、静かに、(中略)椅子から立ち上がり、(中略)すーっと右脚を真っ直ぐ上げた。脚は彼の頭の上まで上がった。』ひかえ目にわが学科の看板であったと思う。

(昭和60年ごろ英米文学科で、淀川長治氏に講演会講師をお願いしたところ、じぶんはわりだから弟子の品田を行かせますとのご返事で品田氏が来られる。淀川氏には、(故)板倉保先生が縁ありお願いされた。翌年から品田氏に「欧米映画論」を担当いただいた。)

翌1月7日：『武蔵野英米文学』19号完成納品

翌3月：矢崎正夫助教授1ヵ年の在外研究(米国)

昭和62年(1987年)

委員：甲斐寛美・山口弘恵・矢崎正夫 事務担当：伊藤史子

(秋季講演会11月27日) D103番教室

講師＝末松良道(専任講師)「古英語の時代と文学」

(録音テープ ③⑥③⑦CT)

4月：末松良道専任講師着任

翌2月：『武蔵野英米文学』19号完成納品

昭和63年(1988年)

委員：山口弘恵・清水隆・野崎晴雄 事務担当：伊藤史子

(秋季講演会11月25日) D102番教室

講師＝マーク・ピーターセン(明治大学専任講師・本学非常勤講師)

「日本人と英語」

(録音テープ ③⑧CT)

平成元年(1989年)

委員：野崎晴雄・清水隆・末松良道 事務担当：伊藤史子

(秋季講演会11月25日) D102番教室

講師＝矢崎正夫(助教授)「ヨーロッパのヘミングウェイ」

(録音テープ ③⑨④①CT)

平成 2 年 (1990 年)

委員：末松良道・鈴木五十鈴・山本幸男 事務担当：伊藤史子

(秋季講演会 11 月 27 日) R405 番教室

講師＝荒木暢也 (専任講師) 「アメリカのメディア報道に見る日本のイメージ」 (録音テープ ④①CT)

翌 2 月 25 日：『武蔵野英米文学』23 号完成納品

平成 3 年 (1991 年)

委員：鈴木五十鈴・山本幸男・荒木暢也 事務担当：伊藤史子

(春季講演会 6 月 28 日) D109 番教室

講師＝崎谷哲夫 (特任教授) 「世界と組織」 (録音テープ ④②CT)

平成 4 年 (1992 年)

委員：荒木暢也・井上寿子・佐々木眞理 事務担当：松井由理

(春季講演会 7 月 3 日) R305 番教室

講師＝浅野雅巳 (成蹊大学文学部教授) 「英語の語彙・表現・論理」 (録音テープ ④③CT)

翌 2 月：『武蔵野英米文学』25 号完成納品

平成 5 年 (1993 年)

委員：井上寿子・佐々木眞理・示村陽一 事務担当：松井由理

(春季講演会 7 月 1 日) 6305 番教室

講師＝示村陽一 (助教授) 「アメリカの大学と日本の大学」 (録音テープ ④④⑤CT)

翌 1 月：『武蔵野英米文学』26 号完成納品

平成 6 年 (1994 年)

委員：示村陽一・甲斐寛美・矢崎正夫 事務担当：松井由理

(秋季講演会 12 月 2 日) グリーンホール 1F 多目的ホール

講師＝マーク・ジュエル (早稲田大学教授) 「日本文学と英米文学のはざままで」 (録音テープ ④⑥CT)

翌 2 月 6 日：『武蔵野英米文学』27 号完成納品

平成7年(1995年)

委員：甲斐寛美・矢崎正夫・A. C. 膽畑 事務担当：松井由理

(秋季講演会 12月6日) 1103教室

講師＝井上寿子(教授)「“Morgan”を通して——E. M. Forster 研究」

(録音テープ ④7CT)

翌1月26日(金)：『武蔵野英米文学』28号完成納品

平成8年(1996年)

員：A. C. 膽畑・山口弘恵・野崎晴雄 事務担当：松井由理

(秋季講演会 10月11日) 3301教室

講師＝竹村日出夫(工学院大学教授)「映画に見るニューヨークの英語」

(録音テープ ④8CT)

翌2月25日(火)：『武蔵野英米文学』29号完成納品

平成9年(1997年)

委員：山口弘恵・野崎晴雄・須長桂介 事務担当：松井由理

(秋季講演会 7月4日) 7204教室

講師＝荒木暢也(助教授)

「Commercialism vs. Journalism ——現代米国メディアの一考察」

(録音テープ ④9CT)

翌2月27日(金)：『武蔵野英米文学』30号完成納品

翌3月10日：

『英米の文学と文化』(山口弘恵・矢崎正夫 編著 開文社出版) 刊行

(『武蔵野英米文学』30号記念並びに鈴木・井上・板倉3教授退官記念の
論文集)

(「英文学会：メモ」記録コマデ)

平成10年(1998年) 委員：須長桂介・示村陽一 事務担当：松井由理

4月：立教大学より原川恭一教授着任

大学院言語文化専攻ほか開設

山本澄教授在外研究(英国)

(秋季講演会 6月24日) 7101教室

武蔵野英米文学

講師＝野田研一（立教大学観光学部教授）

「自然との交感——ネイチャー・ライティングの世界」

（録音テープ ⑤0CT）

翌2月17日：『武蔵野英米文学』31号刊行

平成11年（1999年）委員：示村陽一・原川恭一 事務担当：松井由理

（秋季春季講演会6月28日）1102教室

講師＝山本澄（教授）

「英国のマルティ・カルチャー——ロンドンの年中行事を中心に」

（録音テープ ⑤1CT）

翌3月14日：『武蔵野英米文学』32号刊行

平成12年（2000年）委員：原川恭一・山口弘恵 事務担当：不明

（講演会11月2日）1201教室

講師＝佐々木真理（助教授）

「『フランケンシュタイン』にみる理性と感性について」

（録音テープ ⑤2CT）

翌2月15日：『武蔵野英米文学』33号刊行

学科名が「英語・英米文学科」に

平成13年（2001年）委員：原川恭一・山口弘恵 事務担当：不明

（秋季講演会12月4日）1102教室

講師＝佐々木瑞枝（横浜国立大学教授）「Japanese as a Foreign Language」

（録音テープ ⑤3CT）

翌3月14日：『武蔵野英米文学』34号刊行

末松良道教授 在外研究（英国）

平成14年（2002年）委員：原川恭一・山口弘恵 事務担当：不明

（講演会12月11日）1303教室

講師＝末松良道（教授）「中世のカンタベリー——歴史と文学」

（録音テープ ⑤4CT）

翌3月7日：『武蔵野英米文学』35号刊行

佐藤晴雄教授 在外研究（米国）

平成 15 年 (2003 年) 委員：原川恭一・山口弘恵 事務担当：不明

(講演会 12 月 10 日) 1303 教室

講師＝佐藤晴雄 (教授) 「The American Family」 (録音テープ ⑤CT)

翌 3 月 9 日：『武蔵野英米文学』35 号刊行

(「英文学会 1」ノ記録コマデ)

4 月：校名が武蔵野大学に

校名変更に伴い「武蔵野大学英文学会」に名称変更

佐々木真理助教授 在外研究 (子連れ英国留学)

山口弘恵教授定年退職

翌 2 月 15 日：『武蔵野英米文学』36 号刊行

翌 4 月：男女共学 (全学部)

平成 16 年 (2004 年) 委員：原川恭一・矢崎正夫 事務担当：深谷礼子

(講演会 12 月 10 日) 教室不明

講師＝佐々木真理 (助教授) 「ロンドンの昔と今——ロンドン散歩」

翌 2 月 15 日：『武蔵野英米文学』37 号刊行

翌 3 月：山口弘恵教授 定年退職

平成 17 年 (2005 年) 委員：矢崎正夫・原川恭一 事務担当：深谷礼子

(講演会 12 月 1 日) グリーンホール

講師＝^{なかしよのぶお}中所宜夫 (能楽師 観世流シテ方) 「新作能『オセロ』の世界」

翌 2 月 15 日：『武蔵野英米文学』38 号刊行

原川恭一教授定年退職

示村陽一教授 在外研究 (米国)

平成 18 年 (2006 年) 委員：矢崎正夫・示村陽一 事務担当：深谷礼子

(講演会 11 月 21 日) 教室不明

講師＝示村陽一 (教授) 「ヒスパニック化するアメリカ」

翌 2 月 15 日：『武蔵野英米文学』39 号刊行

平成 19 年 (2007 年) 委員：示村陽一・山本證 事務担当：深谷礼子

(講演会 11 月 15 日) グリーンホール

講師＝林望 (作家) 「イギリスで暮らしてみました」

3月：山本澄教授 定年退職

末松良道教授 退職、英国留学

5月31日：英語・英米文学科 奥田征夫^{ゆくお}特任教授 死去（64歳）

通夜：柏市 南柏会館

告別式：同所

6月6日：元学長 山本幸男教授 死去（80歳）

8月14日：元英米文学科教授 井上寿子 死去（80歳）

[故 井上寿子名誉教授の従兄弟 市村ご夫妻から寄付

寄付金 1000万円と図書が寄贈される]

このたび、平成19年に亡くなられた井上寿子名誉教授の従兄弟である市村有二・和子ご夫妻より、井上名誉教授の遺産から1000万円と図書をご寄付いただいた。6月17日(木)には市村ご夫妻が来校し、田中学院長と面会が行われ、直接お礼の言葉が伝えられた。今回の寄付は井上名誉教授のご遺志を受け、市村ご夫妻がお申し出くださったものである。

[有明キャンパス グローバル・コミュニケーション学科関係資料室の施設充実に]

井上名誉教授が所属していた文学部英語・英米文学科は、来年度グローバル・コミュニケーション学部グローバル・コミュニケーション学科に改組され、平成24年4月から2年生以上は有明キャンパスで学ぶことになる。寄付金は有明キャンパスでの同学部学科関係資料室の施設・機器の充実に使われる予定である。市村ご夫妻のご厚意に心より感謝したい。(市村夫妻写真)

『MG ライフ』第148号（武蔵野女子学院 総合企画部広報室、2010年7月15日）より転載

翌1月28日：元英米文学科主任・図書館長 板倉保教授 死去（80歳）

通夜：府中市 日華斎場

告別式：同所

板倉 保氏 (いたくら・たもつ=武蔵野大名譽教授、英米文学)
1月28日午前10時16分、多臓器不全のため山梨県中央市の病院で死去、80歳。香川県出身。(中略) 葬儀・告別式は2月4日午前10時から東京都府中市多磨町2の1の1、多磨葬祭場日華斎場で。喪主は妻トヨさん。(共同通信)

翌2月15日：『武蔵野英米文学』40号刊行

平成20年(2008年) 委員：矢崎正夫・佐藤晴雄 事務担当：深谷礼子
(講演会12月5日) 1302教室 ジョイント講演会

講師=佐藤研一(専任講師)「豪州シドニー大学における大学生能力開発の取り組みについて」

講師=小塚高志(専任講師)「Shakespeare and Snails: Education in the 16th Century and Shakespeare Studies in the 21st Century」

翌2月15日：『武蔵野英米文学』41号刊行

3月：須長桂介教授 退職

伊良部^{あきこ}祥子専任講師 定年退職

平成21年(2009年) 委員：矢崎正夫・佐藤晴雄 事務担当：深谷礼子
(講演会11月20日) 教室不明

講師=佐藤^{きみお}生美雄(元コストコ店舗開発部長)「コストコ創始」

12月5日、元英米文学科教授大谷利彦 死去(90歳)

翌2月15日：『武蔵野英米文学』42号刊行

平成22年(2010年) 委員：矢崎正夫・佐藤晴雄 事務担当：佐藤晴雄
(講演会11月16日) 1303教室

講師=金子敦子(専任講師)「私の履歴書——職業人生を振り返る」

翌2月15日：『武蔵野英米文学』43号刊行

平成23年(2011年) 委員：矢崎正夫・佐藤晴雄 事務担当：佐藤晴雄
講演会開催されず

翌2月15日：『武蔵野英米文学』最終巻44号刊行

(記録のある最終講義)

井上寿子 最終講義 平成9年1月22日 (1201教室)

「E. M. Forster を追って」

(録音テープあり)

鈴木五十鈴 最終講義 平成9年1月22日 (1201教室)

「南部文学と『風と共に去りぬ』」

(録音テープあり)

山本幸男 最終講義 平成11年5月28日 (雪頂講堂)

「文明社会と非文明社会の価値観について」

山口弘恵 最終講義 平成17年1月19日

「ブロンテ姉妹と私」

(録音テープあり)

【補遺】

(218頁) 原仙作の項目

手元の『龍山公立中学校創立七十周年記念誌』目次に、「付録三 龍友会誌各号目次」があったので、収蔵館(名古屋大学附属図書館)から取り寄せた。この同窓会誌20号(目次)には、相川清「原先生の回想」、22号(目次)には「BEHAVIOUR CODE FOR THE PEOPLE ON THE HOME FRONT」Translated by S. Hara が見える。続いてある、目良五六「銃後国民訓」の英訳かとも思われる。『七十周年記念誌』中には、「(黒板の)文字の綺麗な方…原先生は机間巡視の体にて、後ろの方から自分の板書をチラリと見て自ら楽しむ風」(竹内研次郎)という回想も。

【謝辞】

この記録を書くにあたり、久保田珠江さんは大事な記憶の袋を空けてくださり、鈴木五十鈴先生・山口弘恵先生はわたしの執拗な質問にお答えくださり、千輪絹子先生は往時を語ってくださり、鈴木建三先生は原先生やサッカーや君島邦守さんのことを話して下さった。岡崎清氏(札幌学院大学人文学部教授)は札幌の地理・歴史を教えてくださいました。また大学図書館のかたがたには、最後まで先達の資料蒐集などに惜しみのない協力をいただいた。皆さんにあつく御礼申しあげます。

(平成24年2月7日記)